
MOON-4 夜叉 3 <19>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 3 <1-9>

【ZPDF】

Z0904Z

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

全ての謎を解くため、再び新宿へと戻った裕希。しかし、記憶を失った秀と出会い、

MOONシリーズ第4弾『夜叉 3』 第2話です。

1・君がいない・2(前書き)

いよいよ核心に迫つてきました。

1・君がいない・2

夜も遅く寝静まる頃、裕希はその部屋へ入った。

「たぶん、桜の事だ。俺を襲つて来ても殺そつとはしないだろ?」

「シングル・ルームの白いベッドに制服のまま寝つ転がり、天井を見上げる。

『駄目だ、裕希!』

あれは確かに和人の声だつた。

「でも、どうして」

左向きになり、「秀さんは俺を連れ去るうとしたんだろう - - あれは、秀さんじゃない。和人もどうして生きてるなら姿を現してくれないんだろう。」

そして、朝子はどうなつたのだろう。

そんな事を考へてゐるうちに、昼間の疲れが出たのか、微かな眠気を覚えた。

念のため、『それ』を枕の下にいれ、そのまま眠りに落ちる・・・

刹那。

ガシャン・・・・・!

「！」

飛び起きると窓ガラスが割られていた。

素早く枕の下に入れたばかりの、ジャック・ナイフを取り出し、

「誰！秀さん！？」

「人だ。」

「いい血を持つている。」

広い室内に紅の灯りが集つた。

吸血鬼たちだつた。

「新宿にいれば、和人や秀さんの情報が入ると思ってたけど」

ナイフを眼前にかざし、「お前たち九桜の側か？和人の一族か？」

裕希は叫んだ。

が、彼の言葉を無視して5人程の吸血鬼^{ヴァンパイア}が裕希目指して突進してくる。

「やめろっ！」

目を細め、左手のジャック・ナイフを一人目の胸に突き立てる。

「うあーっ！」

迸る『闇』の血。

裕希は傍らの椅子を投げ、他の吸血鬼を攪乱させた。

手に当たる室内の物を全部闇の者へと投げ、自分は割れたガラスの前に立つ。

ここは12階。

裕希もそれは承知だつた。

（もし、あの時の声が本当に和人なら）

裕希は思つた。（俺が和人の『記憶』を共有しているのなら、何か『策』があるはずだ。）

「もう一度聞く。」

裕希は背後から風を受けながら、「今、お前たちの『帝王』は何処にいる。本当に人の血を求めるのであるのなら、それは九桜の一族だろう。」

「・・・・・」

一斉に、吸血鬼の行動が止まつた。

裕希は目を細め、

「お前たちが知つてゐる事を全て俺に話すんだ。それで、お前たちの本当の『帝王』を俺が取り返して見せる。人の血を頼らなくと

もその帝王の血^{エナジー}で飢える事なく闇に生きる事を約束する。「

そして、右手の指先をナイフで少し切る。

一筋の血が、暗い床に滴る・・・・・

「これは『光』と『闇』との『契約』だ。」

裕希の口調は三か月前と比べて、大人びたものだった。「決して超えてはならない、『光』と『闇』との契約。もし、この血が欲しければ、お前たちが知っている事を全て話せ。」

いつもと違う雰囲気の裕希だった。

吸血鬼たちの間に、どよめきが起こる。

「この血は・・・」

一人の男性の吸血鬼が呟く。「この血を我らは飲んではならない。

「そう、この子に何かあつたら帝王が・・・」

続いて女性が何かを恐れる様に言った。

「この血は・・・触れてはならない。」

静まり返る室内。

「何か」

裕希は彼らに問いかけた。「知っているんだね。『帝王』を蘇らせる何かを。」

「・・・・・帝王を」

一人のサラリーマン風の男性が言った。

「帝王を『復活』させるのは、『帝王』の・・・」

と、言った時、既にその吸血鬼は裕希の背後から突如飛び込んだ一陣の風に四肢を引き裂かれていた。

「！・・・・・・・・・」

裕希は、その風を避けた。

が、次の瞬間にはその『風』に抱かれ、中空高く飛翔していた。

眼下に新宿御苑が見える。

裕希を抱いた『風』は、秀だった。

「秀さんつ！」

裕希は振り返り、「どうして……」

「お前に何かあつたら困るからな。」

秀は無表情にそう言つた。「無茶な事をする奴だな。」

「…………って秀さん。」

裕希は目を丸くし、「思い出したの？俺たちの事。」

「何の事だ。」

秀は相変わらずの口調で答える。

それを聞き、裕希は秀の両腕の中で暴れた。

「秀さんの無責任っ！大食いつ！桜の所で何かあつたんでしょう！

？俺を救つたのも桜の命令だろ！」

必死に両腕を離そうとする。

秀は裕希と共に、御苑の一角に舞い降りた。

と、同時に裕希は秀を突き放し、

「何で思い出してくれないの！一緒に暮らしてたじyan、和人と朝子さんと俺と！」

「…………」

紅の光を帯びた闇の目で秀は、「知らないね、俺はいつでもフリーの狼男だ。^{ウルフ・ガイ}

「薄情者！」

裕希は怒鳴つて秀の頬を打つた。

「痛つ！」

「これが最初で最後のぶつ叩きだからね！俺は朝子さんと和人の事守るために新宿へ戻つて来たんだ。桜なんかに捕まる為じゃない！」

「人間の子供がよく言つよ。^{ガキ}

秀は叩かれた頬を撫でながら、「人間如きに何が出来るつづー訳？陽ひの下をのうのうと生きてるだけじゃないか。」

「そんな事ない！」

裕希は反論した。「確かに秀さんみたいな『闇』の人には適わないけど、人は誰かを愛したり、守つたり、大切に思う心を持つてる

んだよ。」

そして、「秀さんもその心、ちゃんと持つてた。『Office To One』の人ともそうだし、何より秀さん、秀さんには人がいたでしょ！和人を『帝王』としてだけに生きるつて生き方変えたのは秀さんでしょ！」

「和人・・・・・・」

その瞳が・・・一瞬、和らいだのに裕希は気付いた。

「思い出してよ、和人の事！」

裕希がそう言つた瞬間、

ガウンッ・・・・・・

一発の銃声が闇を切り裂いた。

と、同時に秀が右肩を押されてバランスを崩す。

裕希には何が起きたか一瞬判らなかつた。

「秀さん！」

裕希は秀に近づこうとした。

が、

「裕希くん、動くな！」

聞き覚えのある声が彼方から聞こえてきた。

「・・・・・こいつ。」

秀は右肩を押されて振り返つた。

僅かな街灯の下、そこには拳銃を構える早坂の姿があつた。

「動くなよ、尾崎秀久。」

そう言い、「さ、裕希くん、こっちく。」

自分の方へと彼を促す。

「早坂さん！」

裕希は一瞬戸惑つた。しかし、再度、

「早く、裕希くん！」

彼に促され秀の側を離れた。

「『めん、秀さん！俺、今秀さんや桜に捕まる説にはいかないんだ。』

早坂の元へと走り寄る。

「必ず助けに行くから、秀さんっ！」

「それは、こっちの台詞だ。」

秀はそう言うと天空高く飛翔し、「朝子のキリマンでも飲んで待つてろよ、篠原裕希。必ず迎えに行くからな。」

「待てっ！」

ガンツ・・・・・

銃声がもう一つ響いた。

「やめて、早坂さんっ！」

裕希は彼の両手に飛びついた。

「どうして？」

早坂は目を丸くした。「あいつは君を殺しに来たんだろう？」

「違うんだよ、早坂さん！」

裕希は訴えた。「秀さんはね、和人が桜にやられた時に何らかの術をかけられて記憶を失ってるんだ！」

「記憶を？」

早坂は怪訝そうな顔をした。「何でまた・・・・・・」

「判らない。」

裕希は首を振り、「何かあつたんだ・・・・あの夜榊に傷つけられて、そして目の前和人を失つて」

早坂を見つめる。「その隙をついて桜が秀さんに何かをしたんだ。

今だつて殺そうと思えばすぐに殺せたのに、秀さんはそうしなかつた。」

「成程ね。」

グレーのスース姿の早坂は溜息を付き、

「・・・・・確かに、殺そうと思えばあの君のお父さんのホ

テルで殺せたし、第一学校を出た所でも彼なら殺せたはず……君
がいう狼男^{「ウルフガイ」}ならね。」

「でも」

裕希は不思議そうに、「何で榊じゃなくて秀さんを俺に襲わせた
りしたんだろう。」

「『凶悪犯人』のよくやる技さ、裕希くん。」

早坂はニヤリと笑い、「相手により大きなダメージを受けさせる
為、つて奴。」

「あ！だから、榊じゃなくて一緒に暮らしてた秀さんなんだ！」
裕希は秀が飛び去った先を見つめた。

「桜……一体、俺たちをどうしようとしてるんだ。あれだけの
目に遭わせてまだ何か『欲しい』ものがあるのか……。」

彼が見つめる先は、半月の月。

1・君がない・2(後書き)

続けての読者さま、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0904n/>

MOON-4 夜叉 3 <19>

2010年10月15日21時11分発行